

症 例

岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における病理
組織検査の報告 —— 1995 年度の集計 ——

佐藤 方信, 佐藤 泰生, 藤井 佳人

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

(主任: 佐藤 方信 教授)

(受付: 1996 年 9 月 5 日)

(受理: 1996 年 11 月 21 日)

Abstract : Pathological examinations undertaken in 1995 at the Department of Oral Pathology, Iwate Medical University, were statistically reviewed.

The number of biopsy materials examined amounted to 722 (including 83 requested from outside sources) from 577 cases. According to histological classifications, odontogenic benign lesions consisted of 5 ameloblastomas, 3 periapical cemental dysplasias, 2 odontomas, 1 squamous odontogenic tumor and 1 adenomatoid odontogenic tumor. Of nonodontogenic benign lesions, 33 were diagnosed as fibromas or fibroma like lesions, 10 as hemangiomas, 9 as papillomas, 8 as lichen planus, 7 as foreign body granulomas, 4 as pleomorphic adenomas, 3 as osteomas, 2 as lipomas, and 2 were neurofibromas. The malignant tumors consisted of 53 squamous cell carcinomas, 3 adenocarcinomas, and 4 other types. The odontogenic cyst consisted of 49 radicular cysts, 19 primordial cysts and 8 dentigerous cysts. Of nonodontogenic cysts, 27 were diagnosed as postoperative maxillary cysts, 25 as salivary gland cysts, 3 as simple bone cysts, 3 as epidermoid cysts, 2 as dermoid cysts and 2 incisive canal cysts. Also found were 26 cases of hyperkeratosis (leukoplakia), 10 epithelial dysplasias, 17 chronic and localized hyperplastic gingivitis (epulis), 31 with Sjögren syndrome, and 60 having chronic inflammatory (granulation) tissue.

Key words : biopsy, statistical survey, oral lesion

緒 言

今日、臨床医学において病理組織検査の重要性は増す一方である。我々の教室では本学歯学部の創設以来歯学部附属病院の病理組織検査を担当し、歯科臨床の一端を担ってきた。昨今、学外の開業医からの病理組織検査の件数も増加

の傾向にある。著者らは病理組織検査を年度ごとに集計し、報告してきたが¹⁻⁴⁾、今回は1995年度の病理組織検査についてまとめたので若干の検討を加えて報告する。

症例と検索方法

1995 年度 (平成 7 年) に行われた病理組織検査

A statistical report of pathological examinations diagnosed in the department of oral pathology of Iwate Medical University in 1995.

Masanobu SATOH, Hiroataka SATO and Yoshihito FUJII

Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka, 020 Japan

Table 1-a. Monthly number of the biopsy -1995-

Medical Source	Month												Total
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
Inside	59	47	66	37	59	51	56	56	49	42	64	53	639
Outside	7	3	8	7	6	8	7	4	2	8	7	16	83
Total	66	50	74	44	65	59	63	60	51	50	71	69	722

査の集計は本学中央臨床検査部病理部門（主任：中村眞一教授）の病理組織検査症例ファイルの中から本学歯学部口腔病理学教室で診断した症例を収集し、これらを種々の観点から集計して行った。

なお、症例数（病変数）の集計にあたっては同一症例（病変）が重複して収集されることのないよう慎重に行った。症例の年齢、性などの臨床的事項は組織検査依頼書の記載によった。

結 果

1. 病理組織検査件数と症例数

1995 年度の組織検査 (Table 1-a) は 722 件あり、そのうち 639 件は学内、83 件は学外の開業医から依頼された検査であった。学内の症例は第 1 保存科、内科、小児歯科が各 1 件で、残りは全て口腔外科 (I, II) からの依頼であった。月別の検査件数では 2 月、4 月、9 月、10 月が少なく、3 月、11 月、12 月が多かった。また、この年度の迅速診断は全て学内からの依頼で、その件数は 37 件 (男 24, 女 13) であった (Table 1-b)。

検査した症例数は 577 例で (Table 2), 性別は男性 254 例, 女性 323 例で女性症例が多く、年代別には 60 歳代 (122 例) と 50 歳代 (105 例) が多かったが、10 歳未満が 18 例, 80 歳以上が 20 例あった。

2. 組織診断別症例数

腫瘍および腫瘍様病変と診断した症例数 (平均年齢) について見ると (Table 3), 歯原性良性病変ではエナメル上皮腫が 5 例 (45.8 ± 16.8 歳) で最も多く、根尖性セメント質異形成が 3 例 (49.0 ± 7.0 歳), 歯牙腫が 2 例 (15.0 ± 5.6

Table 1-b. The Number of frozen section diagnosis -1995-

Sex	Male	Female	Total
No. of cases	24	13	37
Mean age	62.9 ± 14.0	59.8 ± 16.8	61.8 ± 15.1

Table 2. Age distribution of case -1995-

Age group	Male	Female	Total
0-9	7(2)	9(0)	18
10-19	15(2)	23(1)	41
20-29	18(4)	25(8)	55
30-39	15(1)	28(4)	48
40-49	32(5)	40(8)	85
50-59	37(11)	50(7)	105
60-69	50(4)	62(6)	122
70-79	35(4)	35(5)	79
80-89	7(2)	8(2)	19
90-99	1(0)	0(0)	1
Unkown	0(2)	0(2)	4
Total	217(37)	280(43)	577
	254	323	

(): Request from the outside hospitals.

歳) などであった。

非歯原性良性病変 (Table 3) では過角化症 (白板症) 26 例 (59.8 ± 11.4 歳), 上皮異形成 10 例 (73.1 ± 8.7 歳), 血管腫 10 例 (55.2 ± 23.3 歳), 乳頭腫 9 例 (52.1 ± 17.5 歳), 多形性腺腫 4 例 (56.8 ± 15.8 歳) などが多く, 線維腫 (刺

Table 3. The number of tumors and tumor like lesions - 1995 -

Lesion	Male	Female	Total
Odontogenic, benign	4	8	12
Ameloblastoma	2	3	5
Odontoma	2	0	2
Periapical cemental dysplasia	0	3	3
Squamous odontogenic tumor	0	1	1
Adenomatoid odontogenic tumor	0	1	1
Non-odontogenic, benign	43	62	105
Papilloma	2	7	9
Hyperkeratosis (Leukoplakia)	11	15	26
Epithelial dysplasia	3	7	10
Fibroma (Irritation fibroma, Fibrous hyperplasia, fibrous polyp)	16	17	33
Ossifying fibroma	0	1	1
Granular cell tumor	1	0	1
Calcifying epithelioma	0	1	1
Hemangioma	4	6	10
Lymphangioma	0	1	1
Lipoma	1	1	2
Neurofibroma	0	2	2
Schwannoma	1	0	1
Osteoma and exostosis	1	2	3
Pleomorphic adenoma	2	2	4
Basal cell adenoma	1	0	1
Non-odontogenic, malignant	45	17	62
Squamous cell carcinoma	40	13	53
Adenocarcinoma	3	0	3
Adenoid cystic carcinoma	0	1	1
Mucoepidermoid carcinoma	0	1	1
Salivary duct carcinoma	1	0	1
Malignant melanoma	0	1	1
Metastasis of cancer	1	1	2
Total	92	87	179

齢不明1例)であった。

非歯原性悪性腫瘍 (Table 3) では扁平上皮癌と診断した症例が53例 (68.2 ± 11.3歳) と最も多く、腺癌が3例でその他の組織型はそれぞれ1例と少なかった。

嚢胞および嚢胞様病変について見ると (Table 4), 歯原性のもものでは歯根嚢胞が49例 (42.5 ± 17.4歳), 原始性嚢胞が19例 (37.6 ± 22.5歳), 含歯性嚢胞が8例 (33.9 ± 12.6歳) であった。非歯原性嚢胞では術後性嚢胞が27例

(48.7 ± 9.9歳), 唾液腺嚢胞 (粘液瘤) が25例 (21.3 ± 17.5歳) で, 他の型の嚢胞は非常に少なかった。また, 組織学的に確定診断のできなかった嚢胞が5例あった。

炎症性およびその他の病変 (Table 5) では慢性限局性過形成性歯肉炎 (エプーリス) が17例 (45.4 ± 16.7歳), 扁平苔癬が8例 (65.0 ± 8.6歳), 異物肉芽腫が7例, 慢性潰瘍が8例であった。シェグレン症候群の診断を目的に口唇腺105例について検索したが, そのうちの31例

Table 4. The number of cysts and cyst like lesions -1995-

Lesion	Male	Female	Total
Odontogenic	38	38	76
Radicular cyst	20	29	49
Primordial cyst	12	7	19
Dentigerous cyst	6	2	8
Non-odontogenic	31	33	64
Incisive canal cyst	0	2	2
Postoperative maxillary cyst	17	10	27
Salivary gland cyst (mucocele)	11	14	25
Simple bone cyst	1	2	3
Dermoid cyst	1	1	2
Epidermoid cyst	1	2	3
Thyroglossal duct cyst	0	1	1
Gingival cyst	0	1	1
Cyst*	5	0	5
Total	74	71	145

* Precise type not histologically determinable.

Table 5. The number of inflammatory and the other lesions -1995-

Lesion	Male	Female	Total
Apical periodontitis	1	1	2
Chronic and localized hyperplastic gingivitis (Epulis)	8	9	17
Chronic ulcer	2	6	8
Chronic sinusitis	0	4	4
Foreign body granuloma	2	5	7
Lichen planus	2	6	8
Pemphigus vulgaris	1	1	2
Actinomycosis	1	0	1
Sialolithiasis	1	0	1
Sjögren syndrome	1	30	31
Bony fragment	2	0	2
Sequester	4	1	5
Chronic inflammatory (granulation) tissue	32	28	60
No signification change in salivary gland	8	66	74
No evidence of malignancy	5	7	12
No tumor cell invasion	14	1	15
Total	84	165	249

た。シェグレン症候群の診断を目的に口唇腺105例について検索したが、そのうちの31例(52.0 ± 15.2歳)は組織学的にシェグレン症候群が示唆された。また、単に慢性炎症性(肉芽)組織と診断したものが60例あった。

考 察

口腔病理学教室は基礎歯学としての教育と研究の他に病理組織検査を担当することで臨床科の一端を担っている。最近、日本口腔病理学会学術教育診療委員会(永井教之委員長)が全国の口腔病理学教室や中央臨床検査病理部の33名の主任を対象に調査した⁵⁾。それによると20施設で病理組織検査を教室のサービスとして行っていた。今年度は7月27日、28日の両日にわたり第4回日本病理学会認定口腔病理医試験が行われたが、これまでに80名内外の認定口腔病理医が誕生し、活躍している。本年9月1日より、歯科口腔外科が標榜科となったことにともない、同科を訪れる患者の増加が予想され、組織検査件数の一層の増加が見込まれる。

近年、臨床医学において病理組織検査の重要性は高まり、その検査件数は年々増加してきた。我々の教室においても1991年が474件¹⁾、1992年が513件²⁾、1993年が644件³⁾、1994年が660件⁴⁾と逐年的に増加し、今回集計した1995年度は722件と顕著な増加を示した。検査件数を月別にみると、1991年度¹⁾は7月、8月、9月、10月、1992年度²⁾は5月、6月、7月が比較的多かったのに対して1993年度³⁾は夏場には少なく、4月、11月、12月に多く、1994年度⁴⁾は4、5、6月に多いなど季節と病理組織検査件数の間には特別の関連は見られない。ちなみに1995年度は2月、4月、9月、10月に少なく、3月、11月、12月に病理組織検査が多くなっていた。

男女別の症例数を見ると、1991年度¹⁾は男179例、女性170例で、男性症例が若干多くなっていたが、1992年度²⁾は男性169例、女性187例、1993年度³⁾は男性230例、女性282例、1994年度⁴⁾は男性222例、女性301例と女性の

症例が多くなっていたが、1995年度は男性254例、女性323例で女性の症例数が圧倒的に多くなっていた。年代別症例数は1991年度¹⁾と1992年度²⁾は50歳代が最も多かったが、1993年度³⁾と1994年度⁴⁾は60歳代が多くなっていた。1995年度も60歳代が最も多く、病理組織検査を受ける症例の年齢が高くなる傾向がうかがえた。

エナメル上皮腫は1991年度¹⁾に8例あり、その平均年齢は21.8歳と若かったが、1992年度は4例²⁾、1993年度は3例³⁾、1994年度は5例⁴⁾で、それぞれの年度の平均年齢は47.3歳、48.0歳、43.7歳と比較的高かった。1995年度はエナメル上皮腫が5例で、その平均年齢は45.8歳であった。このように1992年以後、エナメル上皮腫の平均年齢が高くなっていたが、この相違は組織型との関連からは解明できなかった。エナメル上皮腫は歯原性腫瘍の中で最も多く、どの年齢にも発生する^{6,7)}が、その好発年齢は20～30歳代⁶⁾、20歳代から50歳で、子供にもみられる病変であり⁸⁾、そのピークは30歳から40歳であると報告されている⁷⁾。

粘膜上皮の病変では乳頭腫が毎年7ないし10例認められたが^{1~4)}、1995年度には9例であり、この5年間では症例数の増減に特別の傾向は見られなかった。過角化症(白板症)は1991年¹⁾、1992年²⁾がそれぞれ10例、11例であったが、1993年度³⁾は22例、1994年度⁴⁾は18例と多くなり、1995年度には26例となり、これまでで最も多くなっていた。乳頭腫、過角化症(白板症)、扁平苔癬の年齢をそれぞれ5年間^{1~4)}で見たと逐年的には特別の傾向は見られなかった。

扁平上皮癌症例は1991年¹⁾が27例、1992年²⁾が36例、1993年³⁾が41例、1994年⁴⁾51例と増加し、1995年度は53例とこれまでの5年間で最も症例が多く、口腔癌症例数の増加傾向が示唆された。また、扁平上皮癌症例の平均年齢は1991年¹⁾は65.0歳、1992年²⁾は60.8歳、1993年³⁾は67.1歳、1994年⁴⁾は62.2歳であったが、1995年は68.2歳とこれまでで最も高齢

となっていた。

歯原性嚢胞の組織型別の症例数では歯根嚢胞、原始性嚢胞、含歯性嚢胞の順に多く、この傾向は過去4年^{1~4)}の集計でも見られた。また、これらの嚢胞の平均年齢は歯根嚢胞で最も高く、含歯性嚢胞で最も若かったが、これらの平均年齢については過去4年間^{1~4)}の症例でも見られた傾向であった。非歯原性嚢胞の大半は術後性嚢胞と唾液腺嚢胞（粘液瘤）であったが、このような傾向は過去の集計^{1~4)}でも見られた。また、これらの非歯原性嚢胞症例の平均年齢を過去4年^{1~4)}の症例について見ると、術後性嚢胞は47歳から51歳の範囲にあり、唾液腺嚢胞（粘液瘤）では21歳から24歳の範囲にあったが、今回集計した1995年の症例もこれらの年齢の範囲に入るものであった。

結 語

著者らの教室で1995年度に取り扱った病理組織検査について種々の観点から集計し、若干の考察を加えてその結果を報告した。

謝 辞

本報告をまとめるにあたり、症例の収集にご

援助をいただいた本学中央臨床検査病理部門（主任：中村眞一教授）臨床検査技師安保淳一氏と収集した症例の整理にあたった口腔病理学講座技術員補寺田敦子さんに感謝します。

文 献

- 1) 佐藤方信, 佐藤泰生, 藤井佳人: 本学歯学部 口腔病理学教室における病理組織検査の報告——1991年度の集計——, 岩医大歯誌, 18:2, 136-142, 1993.
- 2) 佐藤方信, 藤井佳人, 佐藤泰生: 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告——1992年度の集計——, 岩医大歯誌, 18:3, 210-215, 1993.
- 3) 佐藤方信, 藤井佳人, 菊地博生: 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告——1993年度の集計——, 岩医大歯誌, 20:1, 93-97, 1995.
- 4) 佐藤方信, 藤井佳人, 佐藤泰生: 岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告——1994年度の集計——, 岩医大歯誌, 20:3, 312-316, 1995.
- 5) 日本病理学会学術教育診療委員会（永井教之委員長）: アンケート調査報告, 1, 1996.
- 6) 高木 実: V. 歯原性腫瘍, 石川栄世, 牛島 宥, 遠城寺宗知編集: 外科病理学, 第2版, 文光堂, 東京, 113頁, 1990.
- 7) Rosai, J: Ackerman's Surgical Pathology Vol.1, 8th ed. Mosby, St. Louis, p.273, 1996.
- 8) MacDonald, D. G.: Tumors of Oral Cavity, Christopher D. M. Fletcher: Diagnostic Histopathology of Tumor Vol. 1, Churchill, Livingstone, pp.157-158, 1995.